

教育長 様

校番 005 広島県立呉宮原 高等学校長
(全日制課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和5年度 実施報告書**

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

社会の持続的な発展に貢献するため、他者との協働による新しい価値の創造に挑戦できる自律型人材を育成します

教育目標を定めるにあたって「校訓 自立・自律」や「校風 大らかに和める心」といった不易の部分の踏まえながらも、流行に対応するものとして、令和2年度に全教職員から「宮高生の強み・弱み」「育てたい生徒像及びその育成のために目指す資質・能力」「具体的な取組案」集約し、これに基づく教職員研修及び協議を行った。その中でキーワードとして上がった「自律・挑戦・貢献」を教育活動の中核に置くものとして定め、教育目標化した。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

- 自律 ◆ 様々な意見や情報を踏まえて、自分の力で考え適切に判断し自律的に行動することができる生徒
- 挑戦 ◆ 高い目標に果敢に挑戦し、粘り強く努力を続けることができる生徒
- 貢献 ◆ 他者を思いやり協力して行動することにより、仲間や学校・地域に貢献することができる生徒

この「育てたい生徒像」等についても、マスタールーブリックを作成し、シラバス、単元指導計画等に反映して系統的に取り組み始めた矢先に変更することは、デメリットの方が大きいという判断から、教職員の思いを反映させた令和3年度のを継承することとし、令和4年度はその浸透と深まりに力を注いだ。

この「育てたい生徒像」の実現のために身に付けさせたい資質・能力としては、「自律性」「社会性」「探究する力」の3つの側面を重視しており、それぞれの資質・能力を要素分解して、各教科、教育活動等の特性が生かしやすいようにしている。

(3) 学科等の特色

普通科の特色化が求められる一方、地域からはこれまでどおりの学力向上、進学実績、文武両道などが求められ、ヒト・モノ・カネの配分の重点化が困難な状況が続くなか、VUCAの時代を生き抜く力を付けることが変貌する大学入試や就業への対応にもつながり、ひいては地域から期待される人材育成にも応えうると考えている。令和4年度も学校運営協議会、九嶺宮原同窓会等の協力と支援の下、呉宮原高校版「学びの変革」(学習者基点の授業づくり、呉市をフィールドとした「屋根のない学び舎」プロジェクトによる探究活動、ICT機器を生徒が有効に活用した学び、「地域の中の宮高」プロジェクトによる地域貢献活動、国際交流)を推進し、キャリア教育の充実による生徒の進路実現と社会に貢献する人材育成に取り組む学校を目指してきた。今後もこの方針を貫き、総合的で横断的な学びを通して生徒の資質・能力の向上に取り組んでいく。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

- ア **呉から社会・世界へ** 地元「呉」を題材に身近な事象に興味・関心を持ち、疑問を丹念に掘り下げる活動により、最終的に、視点を地域社会や自己の進路選択へと向けていく流れを完成する。
- イ **大人・地域との繋がり** 学校の強みを活かし、呉市役所・地元ゆかりの大人・同窓生といつでも繋がれるネットワークづくりやフィールドワークにより、地域への関心を高め、地域の中の自分を意識する機会をもつ。
- ウ **校内での有機的な関わり合い** 生徒・教員が学年・教科・分掌などを越えて繋がる場面を工夫し、教科横断的な試みをはじめ、個々の学びが繋がることを実感できる仕組みを教科サイドから作る。
- エ **将来に応用できる探究スキル** 探究活動の経験が「将来役立つもの」となることを目指し、必要に応じた「適切な情報収集」「情報の整理・分析・まとめ」「効果的な発表・伝達」「アイデアの実践」を実行できる力を育成する。

オ **生徒・教員共に楽しみ、深まる探究活動** 教員が担当教科の日々の授業で教科の特質を活かした「本質的な問い」を問い続けることで生徒の好奇心を育み、探究心を鍛え、充実した「総合的な探究の時間」の土台を作る。

(2) 1年後の目指す学校の姿

ア 3年間の探究活動の段階ごとの「ねらい」「具体的活動」「評価の観点」を学校全体で共有できている。

イ 探究活動のプロセスは誰でも取り組み、状況に応じて常に修正・変更できるゆとりがあり、持続可能なものである。

ウ 「総合的な探究の時間」以外の教科や学校活動においても、探究的な見方・考え方が活かされている。

エ 「総合的な探究の時間」の計画・実施・評価・改善を通じて、生徒や教員が学年・教科・分掌を越えて有機的に関わらせる仕組みがある。

オ 「総合的な探究の時間」の活動にある程度の自由度が保たれ、生徒や教員が興味や強みを活かして楽しめる。

カ 探究委員会を中心とし、生徒が主体的に探究活動を進められる場が意図的に設定されている。

キ 探究活動を深めるため、中間発表や外部機関の方の訪問など、気づきを得られる場が複数回設けられている。

ク 「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、生徒や教員が地域・卒業生・保護者と繋がるネットワークがある。

ケ 生徒の探究活動が、提案型から実践型へ向かうチャンスがあり、アイデアを形にする生徒が生まれている。

(3) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

○育てたい生徒像の実現に向けて3年間の「総合的な探究の時間」のねらいが学校全体で共有できている。（マスタールーブリックを生徒・教員で活用する場面がある）

○外部コンテストなどへの挑戦を教科サイドから推進するなど、学校全体で生徒の興味を発見・共有し、生徒がチャレンジする気運を高めている。

○各教科の「本質的な問い」で鍛えられた生徒が成果発表する場が「総合的な探究の時間」（以降、「総探」という。）となっている。（教職員は各教科の特性を活かし、生徒の見方・考え方をゆさぶり、好奇心・探究心を育てている。）

○「総探」と各教科との関連を示すカリキュラム・マップ（試行版）が完成している。

○「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、生徒や教員が地域・同窓生・保護者と双方向で繋がるネットワークがあり、地域探究をきっかけに、その後も探究的な学びを継続する素地が育っている。

イ アウトカム（成果目標）

成果を図る1つの材料である授業評価アンケートと学校評価アンケートにおける関連項目で、肯定的な意見が7割以上になることを目標とする。また、「各教科の日々の授業で探究活動の素地を育てる取組」の効果を検証するため、アンケート項目の文言を修正し、学びと実生活の繋がりを実感できているかを確認できるようにする。昨年度に続き「総探」に特化した記述のアンケートも実施し、各教科の働きかけによる思考力や探究内容の変容、さらに外部コンテスト等への挑戦事例などを検証する。

以下はアンケートで向上を目指す項目である。

設問 「総探」で行う探究学習に積極的に取り組んでいる。（主体性）

設問 探究活動において、今後役に立つ力が身に付いていると感じる。（活用力）

設問 授業では、自分たちで考えたり、考えたことを表現したりすることができる。（思考・表現）

設問 授業では、知ることや考えることが楽しいと感じることがある。（好奇心）

設問 授業で学んだことを自分の生活や社会と関連付けて考えることができる。（深い学び）

設問 授業で学んだことと他の教科で学んだことを関連付けて考えることができる。（教科横断）

設問 業では、難しい問いや課題に対しても諦めず取り組んでいる。（チャレンジ精神）

設問 授業では、疑問点を明確にし、その解決に向けて工夫して学習している。（学びに向かう力）

(4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総探」において、各学年とも次の名称で実施している。

（1学年：宮高サーチ、2学年：宮高ゼミⅠ、3学年：宮高ゼミⅡ）

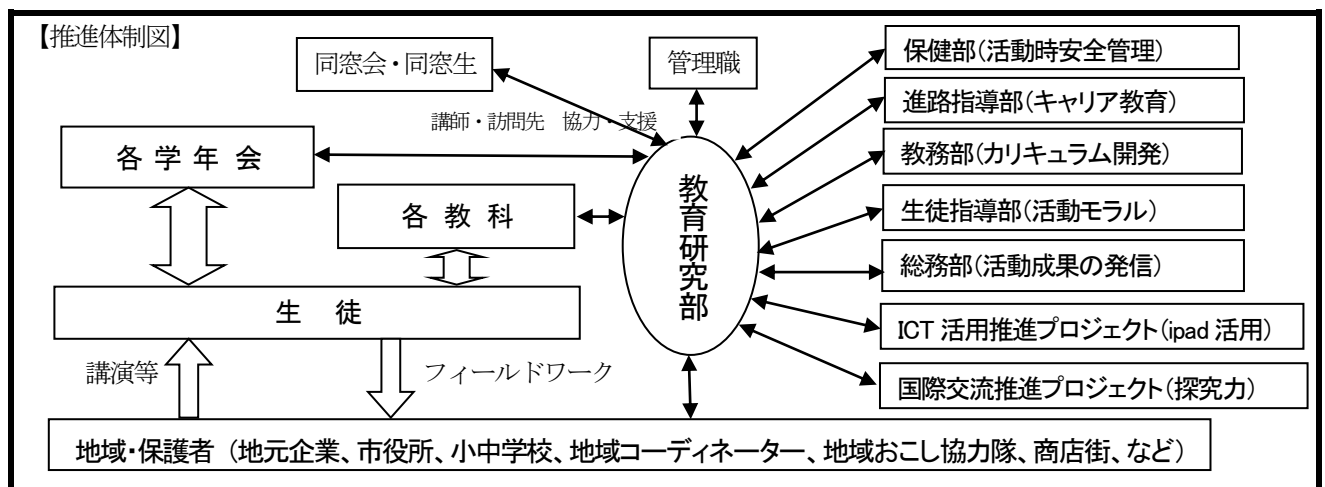
イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発においては、「総探」における探究活動を、将来にわたって学び続けるための方法の1つと捉え、その経験により本校のマスタールーブリックに示す、「自律」「挑戦」「貢献」を実現できる場面を設定し、全教職員が関わられるようにした。教科担当者が、各々の教科の見方・考え方や得意を活かし、日々の授業で生徒への「本質的な問い」を工夫し、「深まりのある探究活動」の素地を育むことを念頭においたカリキュラムづくりである。週1時間の「総

探]は、授業で鍛えた資質・能力を発揮する場と捉え直し、生徒・教員が主体性をもって、やりたいことを見つけて実践できる時間となることを目指した。その際に、各教科がクロスオーバー的な視点を重視し、取り組みやすい単元や場面から、思考や活動がつながるよう試み、1つの教科がいかにか他教科での学びや、校内外の諸活動、社会の動きと関連しているかを意図的に生徒たちに気づかせ、生徒の学びがつながりをもつようにした。

(マイクロレベル)核とするカリキュラム(=「総探」)の充実のための研究対象教科は「理科(化学)」としたが、本校での重点ポイントは、全教科において「深まりのある探究活動を下支える日々の授業づくり」に取り組んできたことだ。化学では、日々の授業で探究心を引き出す題材作りと、レポートによる表現力の育成が行われ、合同授業研究会当日は、本質的な問い3問を生徒に与えて、長時間の思考活動にチャレンジさせた。他校からの授業観察者のナラティブには、「理科の授業に国語科として関わることのできる部分を発見した」、「マスタールブリックを意識して授業を行う重要性に気づけた」など、アクティブの本質を目指した本校の取組のねらいが伝わっていた。他教科の取組では、「公共」の観点から個々の議員の具体的取組に対する質問を練り上げ、市議会報告会を自分事にする実践があった。普段の授業を効果的に年間行事と関連付けることによる、生徒の学びの変容を十分に見取ることができた。今年度重視して取組を進めた2本の柱:「本質的な問いの設定」、「クロスオーバーの工夫」は、誰にでも取り組めるものであり、着実に授業のあり方、生徒・教員の見方・考え方に変化を起こし始めている。

ウ 校内体制



○全教員の参画のため、教育研究部での協議内容を校務運営会議・教科主任会議においても確実に共有し、改善案を共に出し合うスタイルとする。

○外部の様々なイベントへの募集を校務運営会議・教科主任会議で紹介し、効果的な分掌や教科から生徒へ提示してチャレンジを応援する学校文化とし、生徒情報の共有により個々の生徒が力を発揮できる場を積極的に用意する。

○「屋根のない学び舎プロジェクト」の充実のために、探究活動や進路実現のための人材ネットワークを更に広げる。具体的には、学校運営協議会と連携し、幅広い分野の方々との接点や、保護者リソース活用の可能性を探る。

○進路指導部との協働体制を強め、情報共有を密にして、本校での探究活動で進路実現し、継続的に地域活性化に取り組む現役大学生や、地元の大学の活動との連携をさらに推進する。

○フィールドワークや外部連携は、段階的に個々の教員が担える体制づくりを目指す。生徒の訪問先にはできる限り教員も出向いて礼を述べ、地域の声を真摯に受け止めながら今後の改善に生かす。教員が生徒と共に動き、地域と繋がり、新たな気付きを得ようとする姿勢を大切にする。そうすることで、生徒に関する好意的な意見や、新たな活躍の場をいただくなど収穫は大きい。教育研究部員は他学年の動きを把握し、臨機応変に動ける体制をとり、トラブルを未然に防ぎ、起きた場合は確実に全体共有して改善・再発防止に努める。無理な計画には変更やキャンセルの判断も必要である。

(5) 学習評価

○生徒の探究活動の各段階(課題テーマ設定・情報収集・整理とまとめ・発表)の評価は、口頭と記述による自己評価・相互評価を行った。教員は一連の探究活動において、生徒の状況を見取りながら指導・助言を与え、探究が深まるよう支援し、生徒が複数の教員と対話するステップを必須とした。以上は昨年度と同様である。探究の段階ごとの評価基準には、現行のマスタールブリックを微修正して活用を試みたが、段階ごとの評価基準としては内容が曖昧であった。汎用性を重視して現行のルブリックを用いたが、来年度に向けては資質・能力に基づくコンピテンシーの精選をし、レベル毎の達成状況をより具体的な内容に修正していく。年度末は例年どおり文章による3段階の評価を行った。本格的な探究をする2学年では自身の探究活動を振り返るレポートを作成し、自己の思考の変容にも気づかせ、同時に教員が生徒との関わり方を考える材料とする。

○河合塾学びみらいPASSの思考力テストを1学年と2学年で実施した。両学年共に「上手に人と関わり協力する力」が他校との比較でも際立って高いと分析された。マスタートレーブリックにおける資質・能力の「貢献」が評価された。一方、対自己・対課題への力の弱さも目立った。強みのコミュニケーション能力を維持させながら、課題である「探究力の深まり」を今後も教科サイドから鍛えていきたい。河合塾みらいPASSの結果は、個々の生徒が自分の強みを知り、自信をもつ好機となった。自己の興味・関心に気付き得意を活かすことは、探究の手法を学ぶ上でのスタートである。民間テストの結果は「総探」に関する生徒の資質・能力の高まりを図る物差しの1つと捉えたい。

(6) カリキュラム評価

○カリキュラム改善の材料としては、現状把握のための生徒アンケートの数値、日々の授業や探究活動の取り組み方の見取り、さまざまな場面での生徒の姿の変容などがある。昨年度から教育研究部で、生徒・教員を対象に、「総探」に焦点をあてた記述アンケートを実施し、結果を共有している。今年度は保護者にもアンケート結果を共有し、家庭でも生徒の学びがにつながる機会としたい。ナラティブによる探究活動の振り返りや自己分析は、生徒の変容がよく分かり、大変参考になる。生徒・教員の率直な声に、今後の探究活動へのヒントを得ながら、本校らしい「総探」の在り方を探究し続ける。また、学校運営協議会のメンバーや、日頃から探究を支援してくださる方の客観的な本校の現状分析に学び、カリキュラム改善を継続する。

○課題解決（＝探究活動の改善）の主体を、教育研究部が担うという思考から脱却し、部から離れた所へ預け、学校全体の取組を促進するとして昨年度のカリキュラム評価内容は着実に具体化されつつある。特に各教科の取組が横でつながり始め、日常的な雑談の中で自然に教科横断のアイデアが話題にされることは大きな進歩である。来年度の2年生のカリキュラムでは、「総探」と複数の教科がつながり、共通して1つの探究テーマに取り組める仕組みが実現することとなった。

3 令和5年度の成果及び課題

(1) 成果

授業評価アンケートによる年度末の数値に見られる成果を、昨年度との比較（前者）で示すと以下の通りである。

設問1 授業では、自分たちで考えたり考えたことを表現したりすることができる。（思考・表現）59.3%⇒**66.6%**

設問2 授業では、知ることや考えることが楽しいと感じることがある。（好奇心）48.2%⇒**57.0%**

設問3 授業で学んだことを自分の生活や社会と関連付けて考えることができる。（深い学び）43.8%⇒**56.1%**

設問4 授業で学んだことと他の教科で学んだことを関連付けて考えることができる。（教科横断）37.0%⇒**44.5%**

設問5 授業では、難しい問いや課題に対しても諦めず取り組んでいる。（チャレンジ精神）51.6%⇒**59.1%**

設問6 授業では、疑問点を明確にし、その解決に向けて工夫して学習している。（学びに向かう力）46.1%⇒**56.6%**

上記の結果のうち、とりわけ設問3と設問4は「本質的な問い」と「クロスオーバー」を重視して授業に取り組んできた成果と考えられる。また、設問6も飛躍的に上昇し、主体的な学びにも結びついた嬉しい変化である。

次に取組による成果を9点に分けて述べる。これらの成果に共通するキーワードは「つながり」である。

①**全教科による探究活動の土台づくり** 「深まりのある探究活動を下支えする日々の各教科の授業づくり」を学校全体の共通テーマとして掲げ、年間を通じて授業に取り組めたことは主な成果の1つである。毎年11月に実施する本校の公開研究授業のテーマも同様のものとし、研究指定校としての合同授業研究会の対象教科である「理科（化学）」だけの特別な実践にはしなかった。今年度の本校の公開研究授業の対象である「公共」・「数学」・「保健体育」をはじめ、全ての教科でその見方・考え方や得意を活かし、「本質的な問い」そして「クロスオーバーの視点」を意識し、試行錯誤しながらも取り組みを進めてきた。公共の授業と市議会報告会をつなげた試み、家庭基礎のホームプロジェクトでの優れた探究実践例を全生徒に紹介する試みなど、「各教科の実践」を校内の諸活動とつなげる試みが自然なことになってきた。

②**多岐にわたる探究テーマの出現** 2学年のグループ探究テーマが、地域に偏らず、興味・関心に基づいた多様なテーマに変化してきた。教科の授業をはじめ、様々な場面で興味深い話題に触れ、課題意識をもつ機会も増えたことが影響しているようだ。また、ポスターセッションによる成果発表では、iPadも同時に使用し、効果的な発表をする生徒も多い。これは、「保健体育」・「家庭基礎」・「地理総合」・「英語コミュニケーション」など、iPadによるプレゼンテーションを必須とする授業が増加し、日々の授業で身に付いた力を自然に活用したものである。

③**校内リソースのデータ化**： 本校の強みである地域リソースや同窓生リソースを上手く活用する前提として、まず学校が主体性をもち、校内のリソースを有効活用できる状況が求められる。教科担当者だけでなく、管理職や養護教諭も含め、学校の全職員の興味・関心キーワードや探究実践などをリソースとしてデータ化し、全校生徒と教員で共有した。探究へのアドバイスから進路相談に至るまで、学年・教科・分掌などを超えて、生徒と教員、生徒同士、教員同士が有機的につながり、関わりあえる仕組みづくりの第一歩とした。

④**呉ウィークの試み**： 探究活動の前に、まず興味のタネをまく試みとして、全職員が貢献できる「呉ウィーク」を試行した。探究活動での適切な時期に、呉にまつわるエピソード（あるいは疑問など）を全教科の全教員が授業の最初

に語る取組は、生徒・教員共におおむね好評で、来年度は1学期のテーマ設定前、2学期のフィールドワーク前の2回実施とした。呉を題材に探究を進める1年生に、好奇心の芽を育てることを第一のねらいとする。

- ⑤**経験を共有する現役大学生サポーター**： 毎年困難にぶつかる2学年の探究活動への助っ人として、宮高ゼミのフィールドワークで進路を開拓し、現在も地域活性化に関わる大学1年生を講演に招いた。互いに顔見知りである身近な先輩からの気さくな問いかけや、同じ経験をした共感的なアプローチの仕方は、高校生の心にもすんなりと受け入れられ、教員も学ぶ点が多かった。同世代だからこそその影響力があり、今後も大学生とのコラボレーションによる活動の広がりを模索するきっかけとなった。同世代のサポートという点では、「家庭基礎」のホームプロジェクトで呉地区の賞をもらった同級生の身近な探究：「ゲームと睡眠の質」に関する実践発表を聞く機会を2学年全体の総探で設けたこともプラスとなった。
- ⑥**母校は大学生のチャレンジの場**： 高校での探究活動をきっかけに、大学で社会と協働するリアルな探究を実践する卒業生の存在は貴重であり、高校生の進路研究・進路実現への原動力となる。「後輩を無条件にかわいがる」という本校の伝統は今も受け継がれて、現役大学生の多くは大学での実践を快く語ってくれる。後輩との協働的な取組に関心を寄せる学生もおり、来年度は是非実現させたい。今後重要視されるPBLを高校生が体験するチャンスである。
- ⑦**学校運営協議会の有効活用**： 地域探究が始まった初年度からフィールドワークに協力いただく地域コーディネーターが学校運営協議会に加わったことは意義深い。また、総探の実施日と協議会の開催日を同日に設定したことで、日常的な生徒の探究活動を参観し、折に触れて生徒と対話していただく機会が、年間3回生まれた。これにより、本校の実態をより共有でき、様々な分野からの建設的な提案に刺激をいただけることに感謝したい。地域コーディネーターの呼びかけで実現した広島大学都市・建築計画学研究室のプロジェクトに参加した生徒は、実際、探究に悩みを抱える生徒ばかりだったが、大学生の実践を体感することで、自分たちの探究の方向性を定めることができた。
- ⑧**各教科に散らばる探究的な学びをつなぐ**： 異なる教科間で、「深まりのある探究活動を下支えする授業づくり」が話題にされるのが日常化し、雑談がきっかけで、週1時間の「総探」を大幅に拡大するアイデアへと発展した。具体的には、「家庭基礎」の「ホームプロジェクト」、「地理総合」の「地理的な課題と現地調査」のカリキュラムを同時期に重ね、1つの探究テーマに取り組む時間を最大で週3時間に拡大できる可能性が生まれた。来年度の2年生からの実施に向けて、今年度の2学年「地理総合」ではRESASを一定期間活用した複数のプロジェクトに実験的に取り組ませている。
- ⑨**限られた時間内での検証型の探究の実現**： 1人の教員が、授業と部活動の両方で関わりのある生徒へ声掛けすることで、限られた時間内での検証型の探究のモデルケースができた。活動時間は主に土曜日の部活動後の1時間。前年度の3月から声掛けし、「加熱した食用油の粘性」に関する研究で、合計約20時間を確保して12月の発表を実現した。

(2) 課題

「総探」を核とするカリキュラム開発の研究指定校としての3年間が経過した。その途中で、探究は学びの1つの手法であり、探究そのものが目的化してはならないという原点に立ち返る機会があった。これが本校での取組の転換点であり、「日々の教科の授業で探究の素地を育成することが、生徒の探究を深める最大のポイントである」という取組のベースとなった。全教員がそれぞれの授業で探究活動の土台づくりに取り組むという共通認識をもった。そして、3(1)の成果でも記述したように、現在、本校の強みを活かせる探究活動に近づきつつある。しかし、育てたい生徒像の実現に向けた、「3年間を通じた探究活動の流れ」や「学年毎のねらい」が未だに学校全体として十分に浸透していない現状がある。すでに学んだ事柄が生徒の中でつながりをもたず、教科の学びが探究活動に活かせないという悩みから、あらゆる活動につながりをもたせることを意識して、研究指定校としての最終年度に取り組んできた。着実な進歩が見られる一方で、生徒・教員が主体性を発揮して探究を楽しむムードにはまだ程遠い。主体性が発揮できない背景には、目指したいイメージの相違や、どこまでの自由が許されるのかという不安があると思われる。呉宮原高校の校風に合った、枠にとらわれない自由で伸び伸びとした探究活動のために、新年度の初めには十分な時間を確保し、本校で育てたい生徒像と、その実現のために学校全体で取り組む「総探」の3年間の全体像を改めて生徒・教員で確認し、誰もがその中身を語るものとしての探究活動をスタートしたい。

4 令和6年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和6年度の研究目標

ア アウトプット（活動指標）

研究指定校としての3年間の取組は、想定外の困難もあり、途中で軌道修正するなど、当初の計画どおりには進められなかった。目指す姿に近づいてはいるが、目標達成には至っていない現状である。以下の活動指標は、大半が昨年度の内容と重なるが、引き続きこれらの実現・精錬に向けて取組を継続する。試行錯誤の末にたどり着いた本校の目指す探究スタイルを、全生徒・全教員で共に実現していきたい。

- 育てたい生徒像の実現に向けた学校全体の取組となるよう、新年度の最初の職員研修で3年間の「総探」のねらいを、マスタールーブリックと共に確実に共有することを必須とし、その後、生徒・保護者への共有機会も設けている。
- 探究活動を教科サイドからサポートできる仕組みを起動させ、教科の学びに関連したる探究テーマで外部コンテストにチャレンジできる生徒を増やし、進路選択にもつながる取組となっている。

- 校内リソースの活用方法や活用時期が明確になり、個々の教員の担当教科以外の強みが、生徒・教員間だけでなく、生徒同士や教員同士の共有リソースとして、探究活動や進路研究にも生かされる状況がある。
- 「総探」が、日々の各教科の授業における「本質的な問い」や「クロスオーバーの視点」を意識した実践で鍛えられた生徒の資質・能力の成果発表の場となっている。
(教科はその特性・強みを活かし、生徒の見方・考え方をゆさぶり、好奇心・探究心を育む。)
- 「総探」に自由度があり、失敗を恐れずに生徒・教員がその興味や強みを活かして共に楽しみ、主体的に動いている。
- 「屋根のない学び舎」プロジェクトが実働し、学校運営協議会・地域・同窓会・保護者と学校の現状を共有し、探究活動の充実(＝育てたい生徒像の実現)に向けて、地域の人々や活動と双方向につながっている。
- 地域を題材とした探究活動により、生徒が探究の基礎を身に付けると共に、地域に興味・関心をもつ心を育み、将来、それぞれの立場で地元を元気にする人材が育っている。
- 学校を離れても、探究活動で自ら動いた経験や、大人との出会いにより心が動いた記憶や自信が残り、たくましく主体的に生きる原動力をとっている。
- 共有・雑談・ゆとりを大切に、現状や社会状況に即して微修正できる探究スタイルである。

イ アウトカム (成果目標)

令和5年度のアウトプット(活動指標)の成果については、年度末に必ず独自の記述式アンケートを実施し、上記の活動指標に関する生徒・教員・保護者の声を丁寧に検証する。また、その結果を共有し、次年度の取組の改善に向けて共に考える機会を設けたい。

(2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

ア カリキュラム改善の概要

最終年度の終わりに際し、目標達成に向けて未だに進行中であるため、令和6年度のカリキュラム改善の内容については、上記の行動指標と同様とする。

イ 校内体制

- 開発した「総探」カリキュラムの実践に関しては、p.2の【推進体制図】のとおり、教育研究部が校内における情報共有・活動推進の役目を担うが、引き続き、他の分掌、教科、学年団にも同様の役目を分配する。また、授業で探究の下支えをする観点から教科会をさらに活性化し、教科の見方・考え方を「総探」に活かす工夫について議論を深める。
- 進路指導部と連携を強め、保護者説明会などの機会に、本校の探究活動の目標について御理解・御協力を求める。
- 4月当初に転入者も含めて本校の3年間の「総探」の流れを全体共有する。1学年「宮高サーチ」、2学年「宮高ゼミⅠ」、3学年「宮高ゼミⅡ」のねらいや進捗状況は、探究委員が広報の役目を担い、校内で情報共有することにより、学年を横断して生徒の動きが分かる仕組みにする。
- 「総探」の指導計画は、学期毎のねらいや到達目標については教育研究部から提示するが、基本的には担当教員の主体性を活かし、特に2学年では、生徒の探究テーマに基づいて適宜フィールドワークやゲストとの座談会を設定できる自由度をもたせる。(※その際、現状報告・軌道修正・問題解決の場として学年会の機能をより活性化する。)